

熊本県文化財調査報告 第133集

赤池永谷遺跡

九州縦貫自動車道建設(人吉～えびの間)に伴う埋蔵文化財調査

1993年

熊本県教育委員会

熊本県文化財調査報告 第133集

赤池永谷遺跡

熊本県人吉市赤池水無町所在の縄文遺跡

平成5年3月

熊本県教育委員会

序 文

熊本県教育委員会では、日本道路公団の九州縦貫自動車道（人吉～えびの間）建設に伴い、平成元年4月から、路線予定地内の埋蔵文化財の発掘調査を進めて参りました。

ここに報告する熊本県人吉市赤池水無町字永谷所在の『赤池永谷遺跡』は、平成2年11月から平成3年9月にかけて発掘調査を実施し、縄文時代早期の遺跡である事が判りました。その後、平成3年度に整理作業、平成4年度に報告書作成を行ったものであります。

この報告書が埋蔵文化財の保護に対する認識を深め、学術・研究上の一助になれば幸いです。

発掘調査に際しましては、多方面で、日本道路公団福岡建設局人吉工事事務所からの御配慮を賜り、感謝致しております。

さらに、地元の赤池水無町の方々からは多大な御協力があり、専門調査員の先生方からは適切な御指導がありました。ここに心から厚く御礼を申し上げます。

平成5年3月31日

熊本県教育長 道越 温

例 言

1. 本書は日本道路公団の九州縦貫自動車道(人吉～えびの間)建設に伴い、事前に実施した埋蔵文化財調査の報告書である。
2. 発掘調査を実施した遺跡は、熊本県人吉市赤池水無町字永谷に所在する「赤池永谷遺跡」で、日本道路公团福岡建設局からの委託を受けて、熊本県教育庁文化課が行った。
3. 発掘調査は、平成2年11月から年度をまたいで平成3年9月まで実施した。整理作業は平成3年度、報告書作成は平成4年度を行った。
出土遺物・資料は、熊本県教育庁文化課で保管している。
4. 発掘調査は大田幸博(文化課参事)と松舟博満(文化課嘱託)がその任にあたった。
5. 出土遺物の実測は松舟が行い、遺構及び遺物の製図は石工みゆき(文化課嘱託)が行った。
6. 本書の執筆は松舟が行い、補筆を大田が行った。
7. 本書の編集は大田が行い、溝口真由美(文化課嘱託)の協力を得た。

本文目次

第Ⅰ章 調査の概要	1
第1節 調査の組織	1
第2節 調査の経過	1
第Ⅱ章 遺跡の概要	3
第1節 遺跡の位置と地理的環境	3
第2節 人吉・球磨の歴史的(上代)環境	5
第3節 遺跡の層位	10
第Ⅲ章 調査の成果	12
第1節 検出遺構	12
第2節 ^{14}C 年代測定結果について	17
第Ⅳ章 出土遺物	18
第Ⅴ章 まとめ	26

挿図目次

第1図 調査区域図	2
第2図 遺跡位置図	4
第3図 人吉盆地地形図	4
第4図 遺跡周辺地形図	5
第5図 人吉球磨地方の先土器時代遺跡分布図	7
第6図 赤池永谷遺跡周辺の遺跡分布図	9
第7図 遺跡層位図	11
第8図 調査区全体図	13
第9図 第1土塹実測図	14
第10図 第2土塹実測図	14
第11図 集石実測図	15
第12図 遺物実測図①	20
第13図 遺物実測図②	21

第14図 遺物実測図③	23
第15図 遺物分布図	25

表 目 次

第1表 人吉球磨地方の先土器時代遺跡一覧	6
第2表 人吉球磨地方の壺形土器(手向山式)出土遺跡	8
第3表 人吉球磨地方の縄文時代後・晚期の発掘調査事例	8
第4表 赤池永谷遺跡周辺の遺跡一覧	8
第5表 ^{14}C 年代測定結果一覧	17
第6表 遺物検出層位一覧	24

写 真 図 版

図版1 第1土塚 確認状況	29
図版2 第1土塚 検出状況	29
図版3 第1土塚 完掘状態	29
図版4 第2土塚 確認状況	30
図版5 第2土塚 検出状況	30
図版6 第2土塚 炭化物検出状況①	30
図版7 第2土塚 炭化物検出状況②	31
図版8 第2土塚 炭化物検出状況③	31
図版9 第2土塚 完掘状態	31
図版10 集石 確認状況	32
図版11 集石 検出状況	32
図版12 集石 完掘状態	32
図版13 出土遺物	33
図版14 遺跡航空写真	34

第Ⅰ章 調査の概要

第1節 調査の組織

調査主体 熊本県教育委員会

調査責任者 大塚正信（文化課長） 江崎 正（前文化課長）

調査総括 関 昭志（教育審議員） 桑原憲彰（前文化課文化財調査第二係長）

整理総括 松本健郎（文化課文化財調査第二係長）

発掘調査 松舟博満（文化課嘱託：本調査） 大田幸博（文化課参事：試掘）

監督及び整理作業 大田幸博（文化課参事） 松舟博満（文化課嘱託）

石工みゆき・溝口真由美（文化課嘱託）

専門調査員 賀川光夫（別府大学文学部教授） 橋 昌信（別府大学文学部教授）

協力者 鶴嶽俊彦・和田好史（人吉市教育委員会文化課主事）

池下 篤 渡邊 司 北川 中 豊永恵盛 赤池ハルエ

赤池スミコ 木村サツキ 赤池ミチエ 花木誠一

調査事務局 松崎厚生（文化課課長補佐） 中川義孝（前文化課課長補佐）

木下英治（文化課経理係長） 上村忠道（前文化課経理係長）

高濱保子・相馬治久（文化課参事） 大広美枝子・川上勝美（前文化課主事）

日本道路公団福岡建設局人吉工事事務所

村田聰夫（所長） 友納 崇・久保伸一（副所長）

財津 勝（工務課長） 喜多 徹（庶務課長）

発掘作業員及び樹木伐採・土留め作業員

追田洋子 高田ユリ子 山本せい子 中村三香 中村 恵 西 和子

丸尾栄子 早坂 歩 森田洋介 小田則光 小田辰喜 小田ミサエ

小田光子

整理作業員 追田洋子 高田ユリ子 尾方信子 佐田ミヨ子 林 栄三

第2節 調査の経過

[1] 調査の経過

九州縦貫自動車道（人吉～えびの間）は、人吉市赤池水無町にある赤池永谷遺跡（縄文遺跡）の先端域を北方側から南東方向側へ横切る格好になった。

平成元年度に試掘調査を行い、縄文土器片の出土を見たので、平成2年度11月より年度をまたいで平成3年9月まで発掘調査を実施した。なお、平成2年度分の調査は、間に中断期間を

何回か挿んでいる。発掘調査が本格化したのは平成3年度からである。

調査の結果、縄文時代早期の土器を中心に同時期のものと見られる集石(1基)を検出した。さらに、歴史時代の土塁(2基)が確認された。

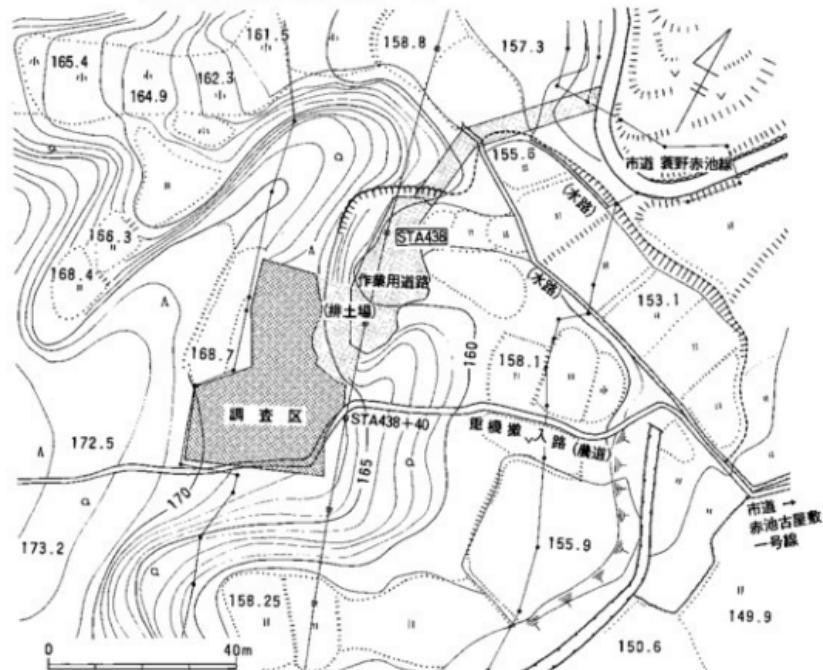
[2] 発掘日誌抄

平成2年11月 山付きにある調査区は、農道から先、細い山道程度の進入路しかなく、重機の搬入に手間取る。結局、東側の市道(赤池古屋敷一号線)より水田道路を利用してこととし、水田地権者の協力を得て、なんとか重機の搬入を行った。

まず、重機によって表土を剥ぎ、排土は路線内の谷間に埋めた。

U字形の谷間を路線が横切るため、程なくして路線外となる谷頭の水田の保護が問題となる。そこで直径300mm・長さ8mのビニールパイプを埋設して、水田の排水路とした。さらに、この上に幅・高さとも2mの盛り土をして作業用道路とし、北側の市道(蓑野・赤池線)に繋いだ。

平成2年12月 谷間への排土が増加して、下部(路線外)の水田へ土砂が流れ込む恐れがでてきたため、谷間を矢板で仕切った。



第1図 調査区域図

- 平成3年1月 埋土に多量の炭化物を含む土塙(2基)を確認する。主たる作業として、Ⅲ層(AH層)を掘り下げる。
- 平成3年2月 Ⅳ層面(暗褐色土層)が露呈した段階で集石遺構を確認する。
- 平成3年4月 Ⅳ層は地質的に見て、縄文時代早期の遺物包含層である。慎重に発掘作業を進める。Ⅳ層から遺物の出土が見られる。調査区全体に、道路センター杭(STA 438+40)を基準とした5m×5mのグリッドを設定した。
- 平成3年5月 Ⅳ層の発掘調査を進める。遺物は平板測量によって隨時、取り上げる。谷間の排土場が再び手狭になったため、重機で転圧した後、矢板箇所に土嚢袋を積み上げて補強した。
- 平成3年6～7月 Ⅴ層(黒褐色土層)の発掘調査を進める。田植えの時期を避け、路線外の地権者より、以前に埋設したパイプの直径が大きすぎるのでは、との申し出があり、直径300mmのビニールパイプの中に直径100mmのものを入れて流水量を押さえた。
- 平成3年8月 雨天時に、排土場から濁り水が流れ出すために、下段域に矢板を打った。
- 平成3年9月 各遺構の作図を行い、下旬に調査を終了した。

第Ⅱ章 遺跡の概要

第1節 遺跡の位置と地理的環境

遺跡の位置

〔1〕
赤池水谷遺跡は、水迫遺跡のある丘陵地帯の丘頂域から、東側へ下がった丘陵斜面部の赤池水無町字永谷に位置している。遺跡の中心部を国土地理院発行の5万分の1地形図「人吉」に位置を求めれば、図幅南より3.8cm、西から5.5cmの所にある。

赤池地区は、丘陵の北東端に中世城の赤池城跡があり、その西北側域に集落が展開する格好となっている。中世において、村は赤池城の麓集落(中世の城下町)であったと思われる。

〔2〕
赤池原丘陵地と赤池永谷遺跡の間は、人我胸川が南方から北下しており、川の左岸地域に水田の広がりを見る。集落は丘陵地の両側山付きに形成されている。

〔3〕
赤池永谷遺跡の上部丘陵地は、〔1〕で述べた様に永迫遺跡で、ここは古くから縄文時代の遺跡として知られている(旧称:土丈原遺跡)。さらに、その北側には連続的に延びる丘陵地があり、この箇所も縄文遺跡(白鳥平A遺跡)である。県文化課では、東側の段下り箇所(白鳥平B遺跡)と合わせて、平成2～3年に発掘調査(九州縦貫自動車道建設に伴う埋蔵文化財調査)を行った。

人吉盆地

熊本県の南東部に位置しており、周囲を市房山・白髪岳などの九州山地に囲まれた断層盆地

である。盆地は東西方向に帯状を呈する格好で大きく開口しており、標高100~200mの高さである。^{あかいけなかなに}赤池水谷遺跡はこの盆地南端にある。

日本三急流の1つに数えられる球磨川は、盆地東端の市房山麓を源流とし、人吉盆地の中央部を東方向から西下し、西北方向の八代海へと注いでいる。

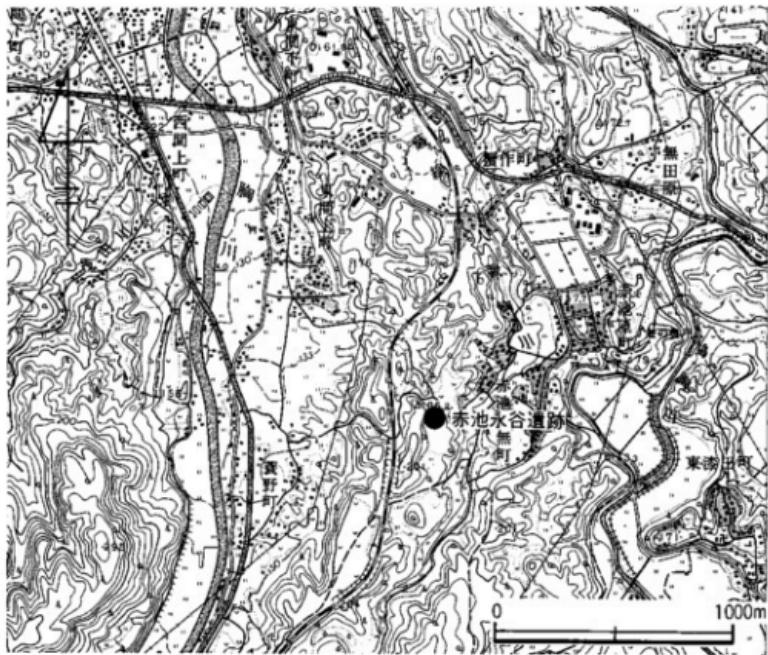
球磨川の右岸には、川辺川によって形成された広大な扇状地と、人吉層・阿蘇溶結凝灰岩・入戸火碎流(シラス・AT)を基盤とする丘陵地が広がっている。



第2図 遺跡位置図



第3図 人吉盆地地形図



第4図 遺跡周辺地形図

人吉市桑ノ木津留と赤池地区について

赤池永谷遺跡のある人吉市は、人吉盆地の南西側寄りにあって、北を球磨郡山江村、西を球磨郡球磨村、東を球磨郡錦町、南を鹿児島県・宮崎県の両県に接する行政区域である。

同市において地質学的に特筆すべき事は、三県が接する桑ノ木津留地区で、黒曜石岩脈の露呈を見る事ができる。この岩脈は先土器時代や縄文時代に、人吉・球磨地方で使用された黒曜石製石器の原石と見られている。

遺跡所在地の赤池地区は旧藍田村で、昭和16年に人吉町・中原村・西瀬村との4町村合併が行われ、人吉市として市政が施行された。

第2節 人吉・球磨の歴史的(上代)環境

先土器時代

今日までに確認されている人吉・球磨地方の先土器時代の遺跡は47か所を数えるが、そのほとんどが人吉市と球磨郡山江村を中心としたものである。しかし、これはこの地域で発掘調査(九州縱貫自動車道建設に伴う発掘調査)や、これを契機に表面採集活動が盛んに行われた事に

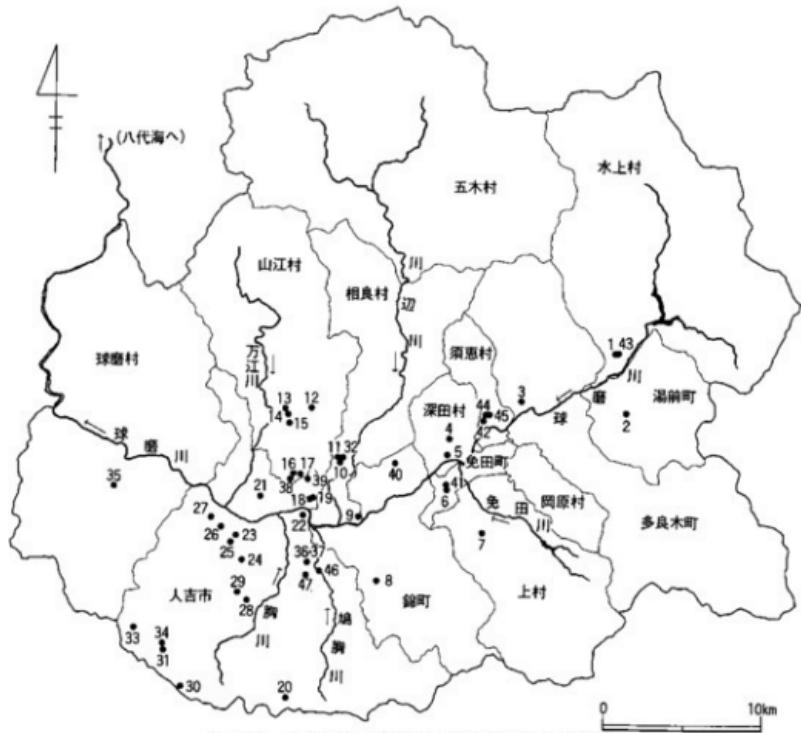
よるもので、遺跡の分布に地域的な片寄りは無いものと思われる。

人吉・球磨地方における先土器時代の調査は、入戸火碎流(シラス・A T)層が肉眼で観察可能なことと、さらにその下層の石器を区別できるという利点がある。

No	遺跡名	所 在 地	時 代				出 土 石 器・備 考
			前	ナ	細	尖	
1	岩野	球磨郡水上村岩野	○				ナイフ形石器
2	田上	球磨郡湯前町田上		○			細刃器
3	里ノ城	球磨郡多良木町里城	○	○			細石核
4	深田遺跡公園	球磨郡深田村萩尾	○				A T層下位より剥片
5	下里	球磨郡深田村下里	○				縫縫中より出土
6	五本松	球磨郡免田町五本松			○		剥片
7	尾鉢	球磨郡上村上字尾鉢		○			細石核
8	小峰	球磨郡錦町西字小峰	○				A T層下位より縫
9	井沢櫻現	球磨郡相良村鶴瀬字井沢	○				ナイフ形石器
10	鳥越	球磨郡相良村深水字鳥越	○				ナイフ形石器
11	小瀬	球磨郡相良村深水字小瀬		○			細石刃
12	段岡	球磨郡山江村山田字段岡	○				ナイフ形石器
13	山渕谷	球磨郡山江村山田字山渕谷	○				ナイフ形石器
14	中山・狸谷	球磨郡山江村山田字山川・字狸谷					A T層上下にナイフ形石器
15	狸谷	球磨郡山江村山田字狸谷	○	○	○		A T層上下にナイフ形石器
16	高城	球磨郡山江村山田字城・字本城	○				ナイフ形石器
17	大丸・森ノ迫	球磨郡山江村山田字森ノ迫	○				ナイフ形石器、他
18	戸ヶ峰	人吉市北願成寺町戸ヶ峰					ナイフ形石器、他
19	一本松	人吉市北願成寺町一本松	○				A T層下位より石核
20	矢岳	人吉市矢岳町西	○				圓錐
21	村山・鶴谷	人吉市城本町鶴谷	○				ナイフ形石器、他
22	天道ヶ尾	人吉市七地町天道ヶ尾	○				ナイフ形石器、他
23	高架須	人吉市下戸越町高架須			○		
24	射場ノ本	人吉市上永野町射場ノ本	○				ナイフ形石器、他
25	大原	人吉市上戸越町大原	○				彫器・石核
26	高山	人吉市下戸越町高山		○			細石核・細刃器
27	中尾	人吉市下戸越町中尾		○			
28	成石B	人吉市木地屋町成石		○			旧魂石遺跡
29	水業山	人吉市上永野町水業山	○				ナイフ形石器
30	国見跡	人吉市東大坂町茶ノ平	○				三種尖頭器
31	植ノ木	人吉市田野町植ノ木		○			
32	深水・谷川	球磨郡相良村深水字谷川	○				彫器
33	福川	人吉市田野町鶴川	○				剥片尖頭器
34	泉木松	人吉市田野町泉木松		○			
35	久保	球磨郡球磨村三ヶ浦字久保	○				A T層下位にナイフ形石器
36	白島平A	人吉市赤池水無町字立山	○	○			細石核・ナイフ形石器
37	白島平B	人吉市赤池水無町字立山	○				剥片尖頭器
38	城馬塙Ⅱ	球磨郡山江村山田字城		○			細石核・細刃器
39	血氣ヶ峰	人吉市鬼木町血氣ヶ峰	○				剥片尖頭器
40	夏女	球磨郡須恵町木上字夏女	○				ナイフ形石器
41	黒田	球磨郡免田町黒田字平城	○				三種尖頭器
42	上手	球磨郡須恵村上手	○				ナイフ形石器
43	(岩野)	球磨郡水上村岩野			○		
44	中尾I	球磨郡須恵村中尾	○				ナイフ形石器・三種尖頭器
45	中尾II	球磨郡須恵村中尾	○	○			ナイフ形石器・細石核
46	鳥廻	人吉市赤池水無町鳥廻	○	○			ナイフ形石器・細石核
47	横木道	人吉市赤池水無町横木道	○				剥片尖頭器

[時代区分] 前：前期旧石器文化 ナ：ナイフ形石器文化 細：細石器文化 尖：尖頭器文化 不：不明
(注) 木崎康弘氏作成の旧石器時代遺跡分類図(『肥後考古』第5号)の人吉・球磨地方に松舟が加筆した。

第1表 人吉球磨地方の先土器時代遺跡一覧



第5図 人吉球磨地方の先土器時代遺跡分布図

縄文時代

[1] 入戸火碎流(シラス・AT層)とアカホヤ火山灰(イモゴ・AH層)の土層中から遺物が出土している。この事により南九州地方の人々は少なくとも二度死滅に近い状況におかれたものと思われる。この二つの火山灰は球磨地方に於いて肉眼観察が可能で、考古学上の鍵となっている。

一般的に、入戸火碎流の年代は2万2千年前、アカホヤ火山灰の年代は6千5百年前と推察されており、その土層間に先土器時代Ⅱ・縄石器時代・縄文時代早期の遺物包含層が挟まれる事になる。

[2] 南九州地方で、縄文時代早期の「手向山式土器」に壺形土器が存在している事は特筆すべき事である。この時期に平底の壺を生活に取り入れるなど、南九州には特異な文化圏が構成されていた事が考えられる。赤池永谷遺跡からは、今回の発掘調査で、早期の押し型文土器・円筒土器・基^{ヨリ}ノ神式土器が出土した。さらに、剥片ではあるが石器素材の水晶が出土している。調査の鍵となるAH層(アカホヤ火山灰)よりも上位の土層は、縄文時代前期以後の土層と思

われる。人吉・球磨地方においても外の地域と同様に、縄文時代中期の遺物は極めて少ない出土であった。この事は現在でもAH層の層厚が30~100cmもある様に、降灰のために植物の復活が遅れた事に起因するものと思われる。必然的に人々の進出も遅れたのであろう。

縄文時代晚期・後期は、人吉市内の七地水田遺跡・アンモン山遺跡・中堂遺跡などの様に、球磨川の河岸段丘に遺跡が存在しているので、人々は低地へ進出を始めた事がわかる。

遺跡名	所在地	報告書
高城	球磨郡山江村山田字城字城	「高城跡」熊本県文化財調査報告第95集 昭和63年度
城馬場I	球磨郡山江村山田字城	「城・馬場遺跡・高城跡Ⅱ」熊本県文化財調査報告第110集 平成2年度
天道ヶ尾	人吉市七地町天道ヶ尾	「天道ヶ尾遺跡Ⅱ」熊本県文化財調査報告第111集 平成2年度
白鳥平A	人吉市赤池水無町立山	「白鳥平A遺跡」熊本県文化財調査報告 第127集 平成4年度
びわんの	球磨郡上村琵琶野	(採集品)

第2表 人吉球磨地方の壺形土器(手向山式)出土遺跡

遺跡名	所在地	調査主体	報告書
アンモン山	人吉市下原田町高千穂	人吉市教育委員会	「アンモン山遺跡」昭和60年度
中堂	人吉市中神町中堂	人吉市教育委員会	「中堂遺跡・長立寺跡」概報。平成2年度
七地水田	人吉市七地町追田	熊本県教育委員会	「七地水田遺跡」熊本県文化財調査報告第101集 平成元年度
谷川	球磨郡相良村深水谷川	熊本県教育委員会	_____
米山	球磨郡湯前町米山	熊本県教育委員会	_____

第3表 人吉球磨地方の縄文時代後・晚期の発掘調査事例

No	遺跡名	所在地	時代	検出物
1	下須馬場	人吉市七地町下須馬場・段治ヶ迫	縄文	石器
2	千太郎	人吉市舞作町千太郎	縄文・歴史	土器・土師器
3	無田ノ原	人吉市舞作町無田ノ原	縄文・古墳	土器・土師器
4	中通	人吉市赤池原町西中通・東中通	縄文・弥生・古墳	土器・弥生住居址・子持ち勾玉
5	赤池城籠館跡	人吉市赤池原町原村	室町・江戸	武家屋敷 土割り
6	赤池城跡	人吉市赤池原町城山	室町	堀切
7	野田	人吉市東塗田町野田	縄文	土器
8	東塗田	人吉市東塗田町中園	室町	堀切
9	外園	人吉市赤池水無町外園	室町	土師器
10	鳥廻	人吉市赤池水無町鳥廻	縄文	集石
11	桐木	人吉市赤池水無町桐木	縄文	石器
12	永迫	人吉市赤池水無町永迫	縄文・歴史	土器・藏骨器
13	赤池永谷	人吉市赤池水無町永谷	縄文・歴史	土器・土塙
15	白鳥平A	人吉市赤池水無町立山	先土器・縄文・歴史	土器・石器・土塙・集石
14	白鳥平B	人吉市赤池水無町立山	縄文・歴史	土器・石器
16	永谷	人吉市東間上町永谷	縄文	土器・石器
17	茂田	人吉市西間上町茂田	縄文・歴史	土器・土師器
18	早水	人吉市赤池水無町早水・發野町平山	縄文・歴史	土器・土師器
19	立野	人吉市義野町立野	平安	藏骨器
20	楠木追	人吉市赤池水無町楠木追	先土器・縄文・古墳	石器・土器・須恵器

第4表 赤池永谷遺跡周辺の遺跡一覧



第6図 赤池永谷遺跡周辺の遺跡分布図

弥生時代

免田式土器を標識とする人吉盆地であるが、盆地内での発掘調査事例は少ない。土器自体は一般的に墓前祭用の儀器であったと考えられているが、^{免田・藤ノ迫遺跡}(球磨郡山江村)の発掘調査では、集落遺構の土塙より検出されている。

さらに、^{夏女遺跡}(球磨郡錦町)からは竪穴住居址に伴う免田式土器と小型彷製鏡の出土があつた。

一方、球磨地方の青銅器を代表するものに、^{槍掛松遺跡}(多良木町黒肥地)出土の細形銅劍がある。

球磨地方の弥生時代の解明は、今後の研究課題である。

古墳時代

古墳時代の中心は、人吉盆地の中央部にあったものと思われる。このことは前方後円墳の^{龜塚古墳群}(球磨郡錦町)や、大型の円墳を有する^{四塚古墳群}(球磨郡錦町)・^{才園古墳群}・^{鬼ノ笠古墳}(球磨郡免田町)などが、この一帯に広がっている事からも伺い知れる。

さらに、盆地中心部を取り囲むような、^{大村横穴群}(人吉市)、^{京ヶ峰横穴群}(球磨郡錦町)があげられ、一方で、小型石室を持った小型円墳の別府古墳群(山江村)、^{石坂古墳群}(球磨郡相良村)、^{千人塚古墳群}(球磨郡水上村)などが存在する。

地下式板石積石室墓は、^{荒毛遺跡}(人吉市)や^{新深田遺跡}(球磨郡深田村)に見られる。

^{天道ヶ尾遺跡}(人吉市)からは、地下式横穴が検出された。当地は華人系の墓制と大和朝廷の墓制が混雜する地域と考えられている。

第3節 遺跡の層位

調査区は杉の植林地であったが、現況から、以前に畑地として開墾されていた事が明らかである。調査区の西縁にある丘陵断面で土層観察を行った。

I層：表土層（暗灰褐色土層）

カカツとした旧耕作土。

II層：黒色土層

土層断面においても、わずかに確認できるだけで、以前の耕作により大きく削平されている。繊りの無い、粒子の細かな黒ボク土である。

III層：AH層（黄褐色土層）

アカホヤ火山灰の二次的堆積層で、繊りがある。無遺物土層である。

IV層：暗褐色土層

縄文時代早期の遺物包含層である。やや繊りがあり、弱い粘質の土層である。

V層：黒褐色土層

上部は縄文時代早期の遺物包含層で、下部に細石器時代・先土器時代の遺物包含層がある。当遺跡から出土した石器は剥片のみで、定形石器の出土は無かった。ブロック状に強く締っており、中九州地方の黒褐色土層と対比できる。

VI層：砂疊層

入戸火碎流の二次的堆積層で、凝灰岩の小円疊層である。砂にシラスが混入している。

VII層：AT層（白色土層）

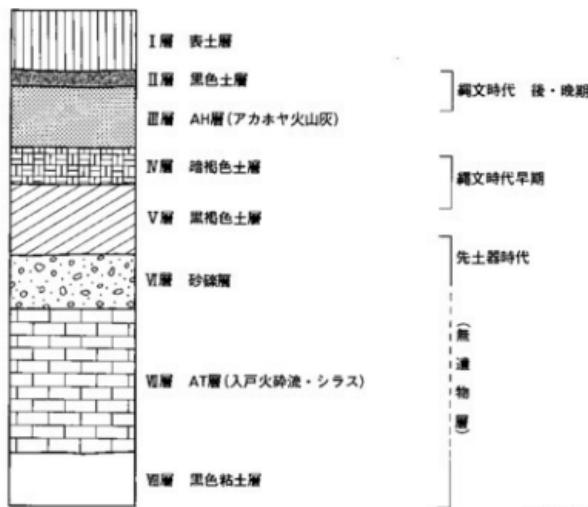
入戸火碎流の一次的堆積層（シラス）。

VIII層：黒色粘土層

AT層の直下土層で、狸谷遺跡の狸谷I石器文化層に対比できる層がある。シラスと黒色粘土層の間にゴチゴチに固まつた鉄分の沈殿層があり、その下の黒色粘土層に管状の褐鉄鉱が見られる。最終下層は明灰色の粘土層となる。

〔参考〕

古仏頂焼「いしの窯」の高場英二氏に覆層から採集した上・下層の粘土を持ち込み、素焼き・本焼きを試みたところ、土色の違いは無関係で、焼き上がりの発色は同じであった。また、県文化課が平成2年から発掘調査中の中尾遺跡（球磨郡須恵村）から採集したAT層下の暗赤褐色粘土層を焼いて見ると、鉄分が多く含んでおり、焼き上がりの発色は黒鉄色となった。



第7図 遺跡層位図

第Ⅲ章 調査の成果

第1節 検出遺構

(1) 土 塚

遺構の確認面はAH層(Ⅲ層)と暗褐色土層(IV層)で、土塚2基が検出された。埋土は炭化物を混入するAH層の二次堆積土が主であったため、AH層(6500年前の土層と推定)以後の遺構であることが伺えるが、一点の遺物も出土しなかった。

一方、当遺跡に隣接する白鳥平A遺跡(人吉市赤池水無町立山)を始めとして、盆地南縁の小川内遺跡(人吉市大畑町)からも同様な土塚が検出されている。

①第1土塚

長方形プランで、長軸2.56m、短軸0.88mを測る。埋土は6層に細分できた。埋土に混入する炭化物は細かく砕けていた。

床面の形状は、長軸方向にやや窪んだ状態にあるが、これについては後述する。焼土は短軸の壁面と長軸の南側壁面に部分的に残っていた。

②第2土塚

方形プランで、長軸1.93m、短軸1.40mを測る。埋土は3層に細分できた。最下層から、長さ20~30cmの木片状の炭化物が出土したが、意図的に並べられた観はなかった。中に櫻類の木片炭化物も見受けられた。

床面には、溝状の掘り込みが見られた。

焼土は、この溝の西側によく残っており、特に先端部は立ち上がりの壁面にまで及んでいた。一方、南東側の先端部近くは部分的な広がりに留まり、東側壁面では中央部でわずかに確認できた。

溝は、煙道かと思われるが、壁面への掘り込みが全く見られないことから、空気の自然通風を促すために設けたものと思われる。第1土塚でも床面にわずかな窪みが見られる事から、同じ様な事が考えられる。

2基の土塚確認に際し、覆い屋的な柱穴の確認に努めたが、至らなかった。

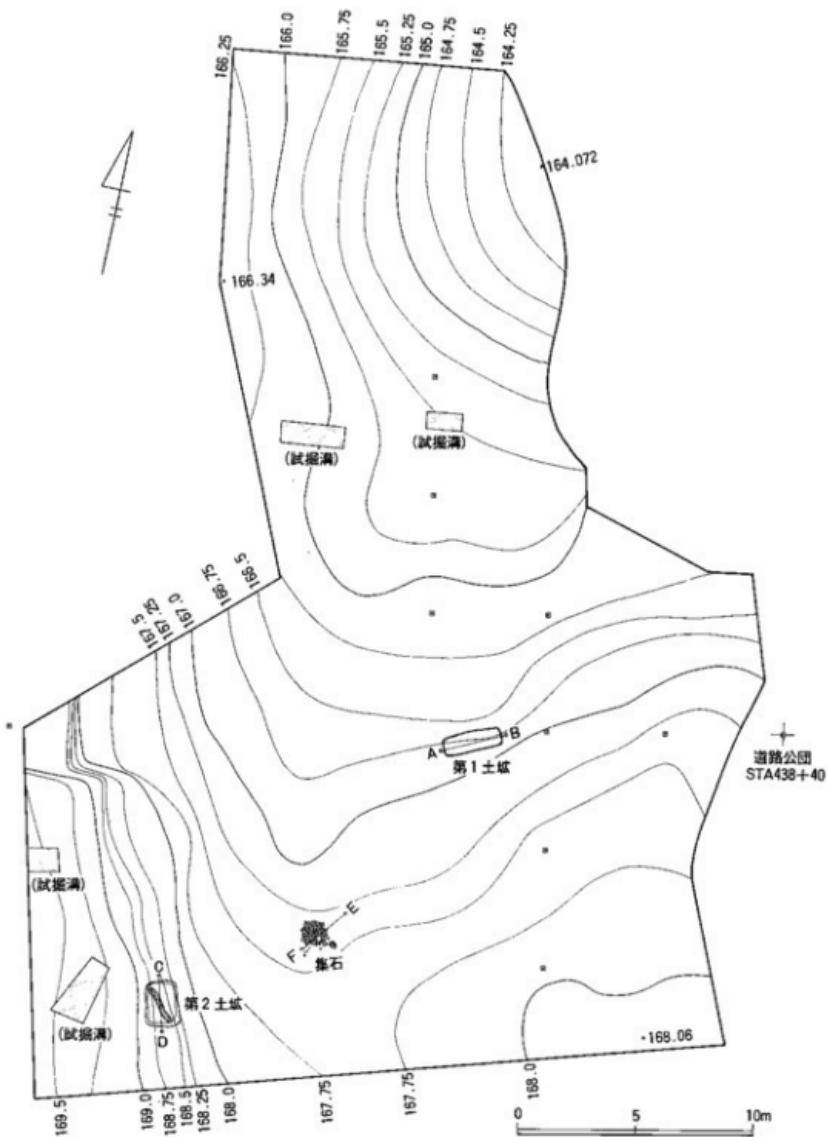
(2) 集 石

IV層土(暗褐色土層)から確認されたので縄文時代早期の遺構と考えられるが、一片の土器も出土しなかった。掘り込み穴の最大径は100cmを測り、集石は330個を数えた。

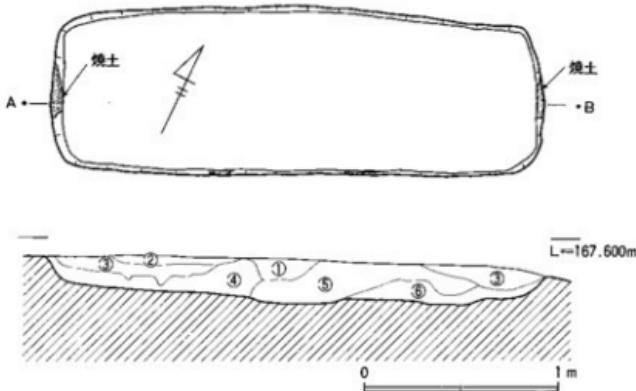
使用痕の残る円礫は、ほとんど凝灰岩で、熱により赤変したものも多く見受けられた。

集石の詰まった土塚の埋土には、米粒大から大豆大の炭化物が混入していた。

集石の中央部南側に、楕円形を呈し、深さ50cmを測るビットがある。埋土はⅢ層土(AH層)を主とするもので、この箇所に限り石の混入はなかった。

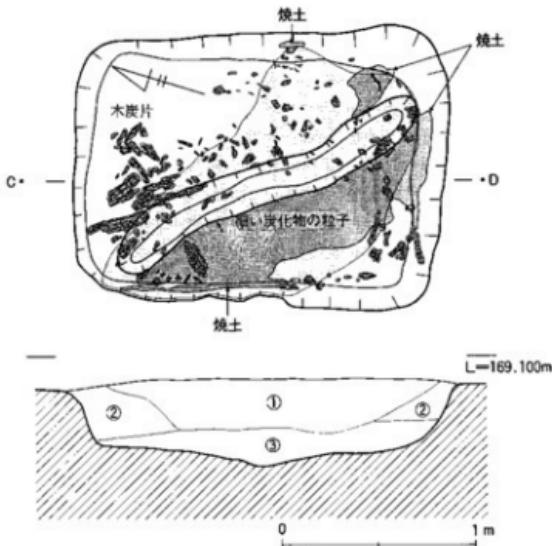


第8図 調査区全体図



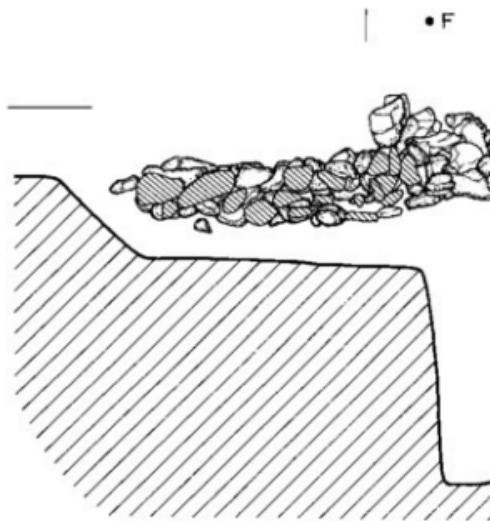
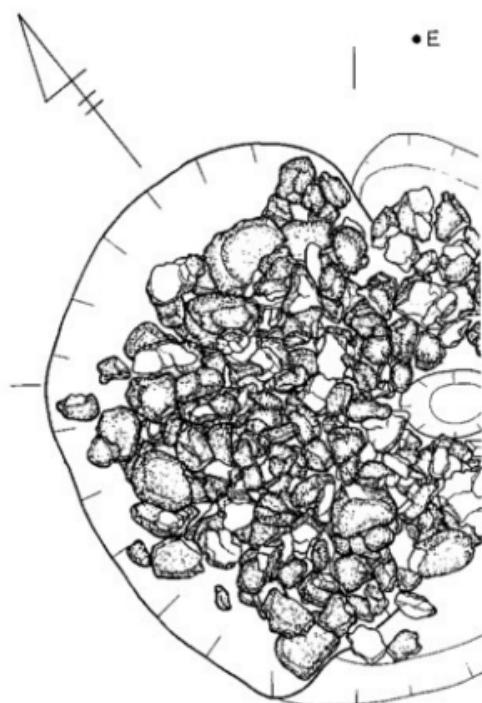
- ① 黄灰色：AHのブロックと直径1cmの大の木炭片が混じる。
- ② 灰色：サラサラとしたAHと灰が混じる。
- ③ 黄暗褐色：AH。木炭片・焼土が混じる(カカフカしている)。
- ④ 暗灰褐色：木炭が多量に混じる。繊りの無い土層。
- ⑤ 黒灰褐色：木炭が多量に混じる。繊りのある土層。
- ⑥ 茶褐色：AHのブロックを含む。繊りのある土層。木炭の混入は少ない。

第9図 第1土塙実測図



- ① 黒灰色：多量の灰と細かい炭化物の粒子が混じる。
- ② 暗黄褐色：AHが土壤化したもので、細かい土壤粒子である。カカフカしている。
- ③ 黒色：多量の木炭が混じる。

第10図 第2土塙実測図



第2節 ^{14}C 年代測定結果について

平成4年1月31日、京都産業大学理学部の山田 治 教授より「赤池永谷遺跡」と隣接の「白鳥平A遺跡」の土塙から出土した炭化物の年代測定結果を頂いた。以前にも、同じような土塙を持った「小川内遺跡」について年代測定が行われているので、合わせてここに記載する。

遺跡名	遺構名	測定番号	^{14}C 年代測定値	西暦
赤池永谷遺跡	第1土塙	KSU-2131	520±20 BP	AD 1430±20年
	第2土塙	KSU-2132	620±15 BP	AD 1330±15年
	第1集石	KSU-2134	4970±160 BP	BC 3020±160年
白鳥平A遺跡	第11土塙	KSU-2133	660±20 BP	AD 1290±20年
	SK-1	KSU-2056	530±10 BP	AD 1420±10年
	SK-2	KSU-2057	520±10 BP	AD 1430±10年
小川内遺跡	SK-3	KSU-2058	540±10 BP	AD 1410±10年

第5表 ^{14}C 年代測定結果一覧

〔注〕 ^{14}C 年代測定値の表現方法は次のとおり国際的約束に基づいています。

(1) ^{14}C の半減期は、5568年とします。現在知られている最も確からしい ^{14}C の半減期は5730±30年ですが、まだ完全ではありません。今までずっとLibbyの採用した半減期5568年が用いられてきているので、確実な半減期が得られるまで変更しないほうが世界全体のデータ比較のために便利です。

(2) BPは Before Present の略です。ただし、PresentはAD1950年に固定しています。例えば500BPということは、AD1950年から500年前であることを意味します。

(3) 測定誤差は1標準偏差です。なお、真の値が1標準偏差の中に入る確立は68%、標準偏差の2倍幅の中には95%、3倍幅の中には99.7%が入ります。

(4) 測定値には、測定機関番号(京都産業大学の場合は、KSU)と測定番号をつけることになっています。データの索引や確認になくてはならないものですから、記録や引用の際には必ずこの記号と番号とを付けておいてください。

[考察]

1. 土塙

各遺跡の共通点として、①炭化物の年代測定結果に該当する遺物の出土がない。②土塙内で火を使用している(床面もしくは壁面に焼土が残る)。③土塙内から炭化物のみが出土している等があげられる。

形状はほとんど長方形で、赤池永谷遺跡の第2土塙のみが方形であった。

土塙の性格として、一つは「炭焼窯」が取り上げられる。現在、人吉・球磨地方で行われている炭焼き窯は、地表上に赤土粘土でドーム状の窯を作り、入口と煙突を設けるやり方である。検出された土塙が「炭焼窯」だとするなら、地面を掘り下げ、木片を並べた後、堆土を上に掛け焼くと言う方法であろうか。しかし、小川内遺跡に限れば、土塙が山頂に位置しているのである。この場合、近くに炭焼き用の木材がある事が第一条件となろうが、薄い地表土の下は

疊層の地盤で、果たして、山頂及びその周辺一帯で炭を焼くだけの雑木が成長するのかという疑問が生じる。仮に、もしそうでないなら、他から材料を運ぶ事になるが、わざわざ生木を山頂まで運び上げ、炭を焼く事は無いと思われる。

一方、見方をえれば、白鳥平A遺跡は丘頂部に位置し、東側に赤池城を望む立地条件である事、赤池永谷遺跡は赤池城の麓館とほぼ同レベルに位置する事、さらには小川内遺跡は小川内番所跡の裏山に位置する事などを考えれば、緊急連絡手段の「烽火」が考えられる。

烽火は、煙を上げて火急を知らせるものであるが、当然の事ながら、その場所は特定され、前もって木々を準備し、火を付けて煙を上げるばかりに準備されていた筈である。烽火としての機能は土塙が方形でも円形でも果たせたと思えるが、今回の一連の調査では、長方形のものが多く見られた。

このことは人吉・球磨地方の名物と言われる霧の発生に起因しているかも知れない。

人吉測候所の計測によると、人吉・球磨地方の霧の発生は年間平均121.8日(1943~1990年)で、ここ30年間の平均日数は108.5日となっている。午前中は太陽の光が全く差し込まない日もあるが、この場合、「煙」による連絡手段は、到底、不可能である。そこで、極論ではあるが、「炎」による手段も考えられよう。「煙」の場合は、烽火台の形状が方形でも円形でも、その機能を果たすことができるが、「炎」の場合、横に広がる帶状のものがより効果的であろう。調査者は小川内遺跡のSK01(長軸4.15m)に見られる長方形が最も理想的な形状と考える。それは「炎」が幅広く見えるからである。

2. 集石

赤池永谷遺跡における集石から出土した炭化物の¹⁴C年代測定は、4970±160BPであった。これは紀元前3180~2860年となり、今から5000年程前の縄文時代前期の遺構という事になる。一方で、集石はAH層(今から6500年前)の下位で確認したもので、しかもIV層土(暗褐色土層)を埋土とするものであった。土層からすれば少なくとも縄文時代早期の遺構である。結果として、¹⁴C年代測定結果と1500年以上のズレが生じる事になった。

第IV章 出土遺物

試掘では、表土から縄文時代後期・晩期の土器が出土したが、本調査においては、この時期の遺物包含層はすでに削平を受けていた事が明らかになった。表土を剥ぐとAH層(Ⅲ層)と暗褐色土層(Ⅳ層)が露呈し、縄文時代早期の調査となつた。

1~6は円筒土器、7~18は押型文土器で、7は山形文土器・8~10は楮円文土器・11~18は格子目文土器であった。19~21は塞ノ神式土器、22・23は縄文時代後・晩期の土器である。24~28は石器で、24~27は磨石、28は打製石斧である。調査区において定形石器の出土は少

なかった。

(土器)

1は貝殻刺突文の円筒土器である。体部はやや外傾し、口径26.5cmを測る。底部は平底になると思われる。文様は、外器面の口縁部に2.1cm幅の貝殻腹縁による2段の連続刺突文が施しており、中位～下位は無文となっている。口唇部にも同一施文具による刺突文が見られるが、口縁部の内面は無文である。2～6の土器より一段階、古い時期のものであろう。

2は貝殻条痕文の円筒土器である。体部はやや外傾し、底部は平底になると思われる。文様は器面が荒れているため、わずかに確認できるだけであるが、貝殻腹縁による押し引きにより、外器面の口縁部を横帯状に巡らしている。外器面の中位～下位は無文となろう。

3は貝殻条痕文の円筒土器である。体部はやや外窵し、底部は平底になると思われる。外器面の口縁部に貝殻腹縁部による押し引きの波状文様(横方向)が施されている。外器面の中位～下位は無文と思われる。

4は条痕文の円筒土器で、破片は体部の下位と思われる。縱方向の深い単線条痕の先端部が残っている。

5は貝殻条痕文の円筒土器と思われる。外器面に貝殻腹縁による縱方向の押し引き痕が残る。粘土が軟らかい状態で施文されたものと思われ、細かな鱗状の微突起が見られる。

6は5と同一固体と思われる。

7は山形押型文の土器で、深鉢形を呈すると思われる。胎土は外器面が赤褐色、内器面が暗褐色である。焼成は良好である。

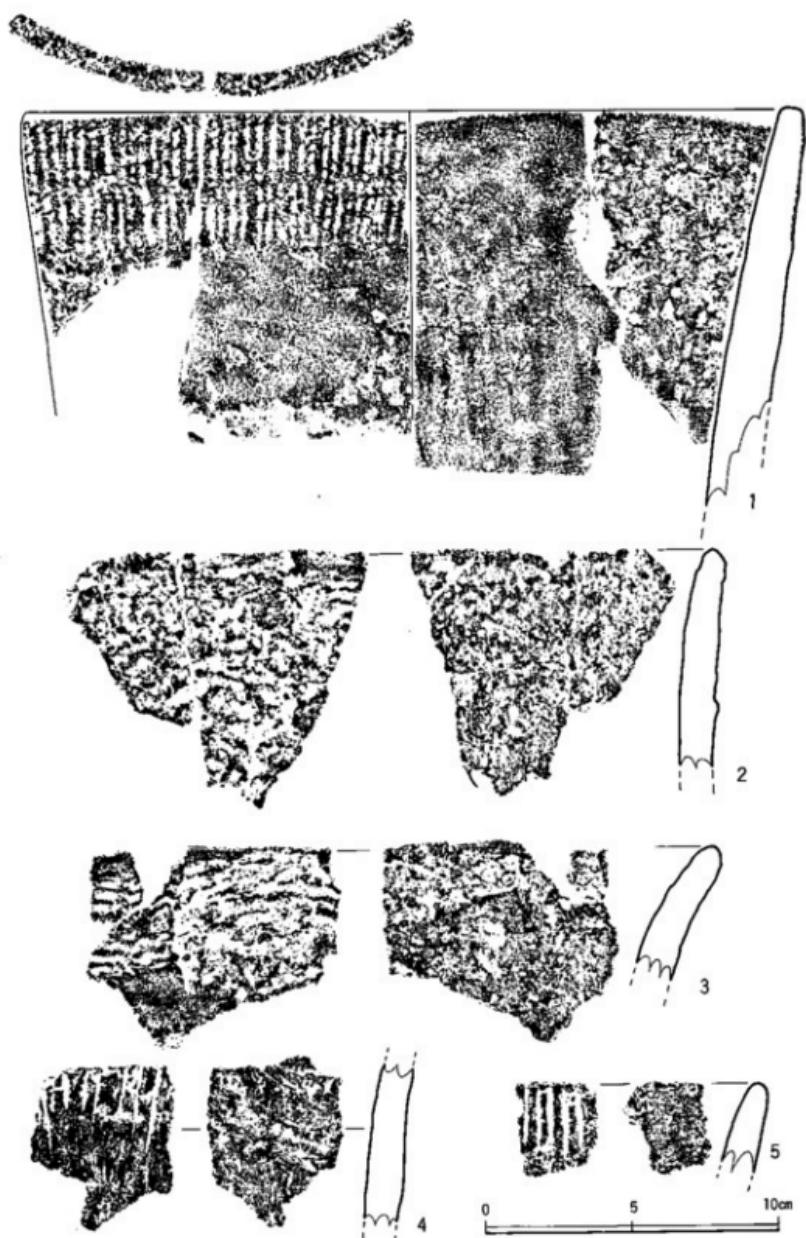
8は楕円形押型文の土器で、外器面の口縁部は剥落している。口縁部で外窵する。文様は、不定形で粗雑な楕円文であり、口縁部の内面にも施されている。焼成は良好で、内器面の指頭圧痕や横方向のナデも観察できる。

9は楕円形押型文の土器で、深鉢形を呈すると思われる。文様は不規則であるが、焼成は良好で、内器面に横方向のナデが見られる。胎土の色調は内外器面とも褐色である。

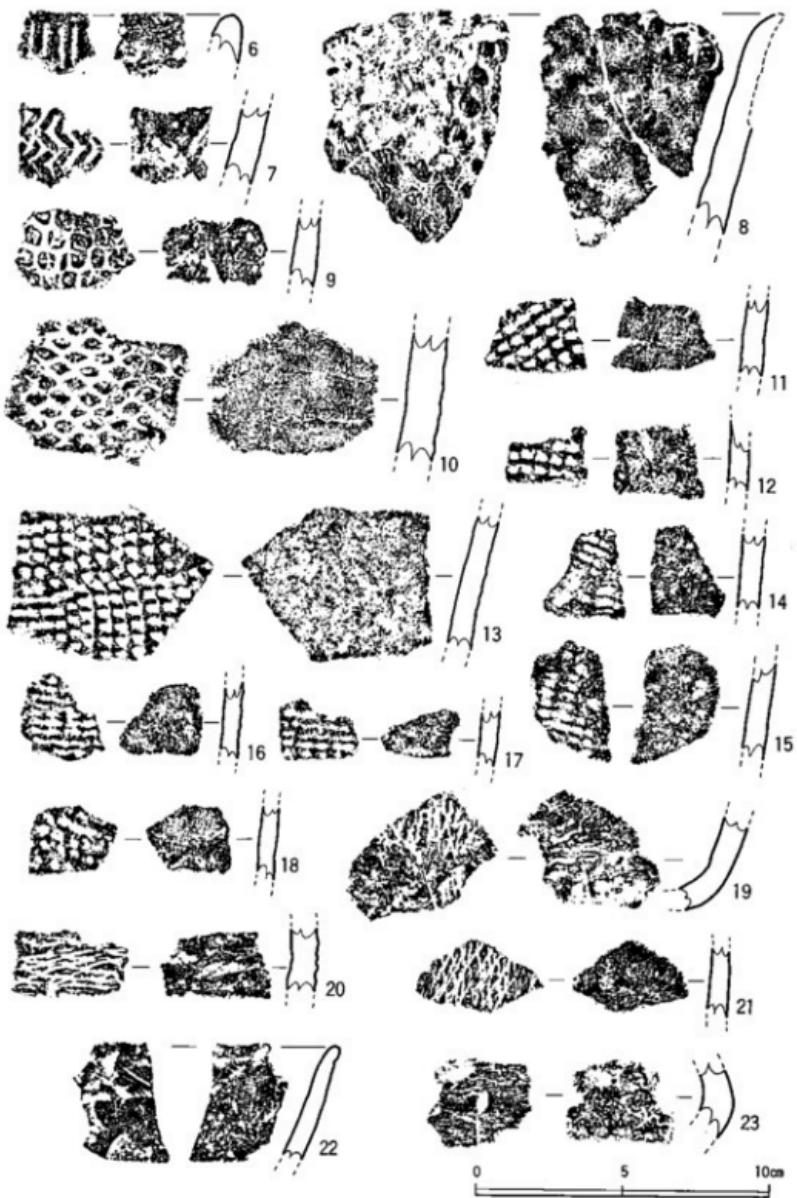
10は楕円形押型文の土器で、深鉢形を呈すると思われる。文様は菱形で、規則正しい配列をなしている。焼成は良好で、胎土の色調は外器面が赤褐色、内器面が黒色である。

11～13は格子押型文の土器で、深鉢形を呈すると思われる。これらは同一固体の可能性があり、色調は3片とも外器面が暗褐色、内器面が褐色を呈している。焼成はやや不良で、器面は荒れており、調整は不明である。

14～18は格子押型文の土器で、14～16は同一固体の可能性がある。器面は荒れて、調整の綿密な観察はできない。しかし、文様は条痕的な長方形のパターンと思われる。貝殻条痕の連点押し引きとも考えられるが、1～6の円筒土器の器厚に対して薄壁であるので、ここでは格子押型文の土器として扱った。



第12図 遺物実測図①



第13図 遺物実測図②

19~21は塞ノ神式土器で、同一固体と考えられる。19は底部の立ち上がり部で、内器面に強い指頭による押し引きが見られる。20・21は体部で、網目撚糸文が施されている。

22・23は縄文時代後・晩期の土器で、いずれも表土からの出土である。22は精製土器の浅鉢と思われる。胎土は緻密で、口縁部直下に一本の沈線が確認できる。23は粗製土器で、体部は逆「く」の字に屈曲している。

〔石器〕

24~27は磨石で、形態的に分けると、①平面的に使用されたもの(25・25)、②丸みを持って使用されたもの(27)、両方の形態を持ったもの(26)になる。

これらは台石(石皿)の使用面の形状により、変化が生じるものと思われる。

28は打製石斧で、長さ14.3cm、幅4.9cm、厚さ2.1cm、重さ180.5gを測る。砂岩製で自然面が残っている。七地水田遺跡(人吉市七地町)などの縄文時代後・晩期の遺跡によく見られる石器である。

〔剥片〕

V層より水晶の剥片が2点(29・30)出土した。29は長さ1.8cm、幅0.8cm、厚さ0.45cm、重さ0.57gを測る。30は長さ0.9cm、幅0.5cm、厚さ0.4cm、重さ0.20gを測る。

〔考察〕

(1) 出土した磨石の形態的な分類に関してであるが、これらは台石(石皿)の使用面の形状により、変化が生じるものと思われる。

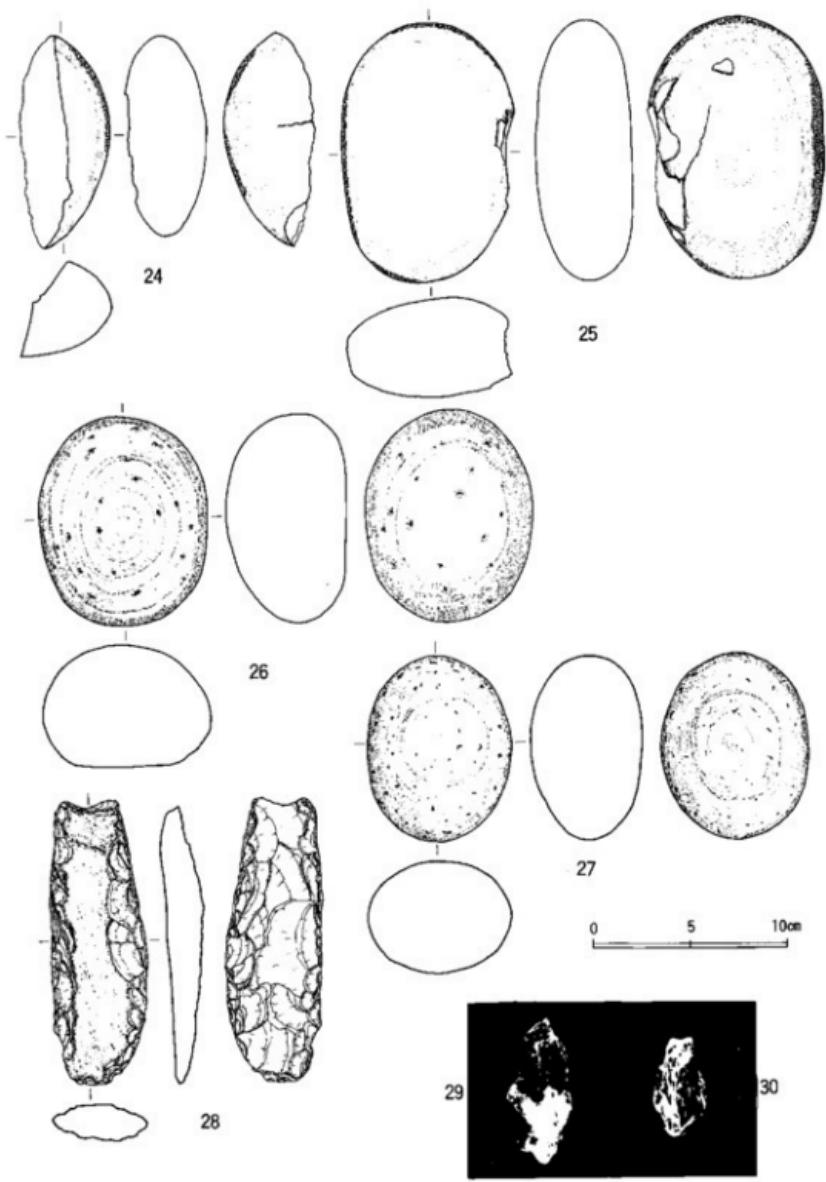
台石が平面的なら、それに対して使用される磨石も、当たりが一面であるから、使用痕は平面的な研磨面になると思われる。対して、凹みを持った台石の使用は、磨石の当たり面は肩部に及ぶ事から、形状は丸味をおびたものとなろう。

(2) 側辺部のほとんどに敲打痕が見られることは、木の実の粗割りが考えられる。椎の実類は、日に干す事によって、殻が自然に割れてしまうので、敲石の必要はないと考える。従って、とりだした中身を粗割りする時に、磨石の側辺部を使用したのであろう。台石は平坦面を使用し、かなり細かくなるまで叩かれたと思われる。側辺部の形状は方形に変形している。

(3) (1)によって粗割りされた木の実をさらに細かくする為に、磨石と台石の平坦面でつぶす工程が行われたものと考えられる。その際、つぶした物が散在しないよう、かなり大きな台石が使用されのであろう。

(4) さらに、細かな粉状にするため、最終的には凹みを持った石皿を使用して摺りつぶしたと考えられる。この工程で使用する磨石は丸味をもったものとなろう。

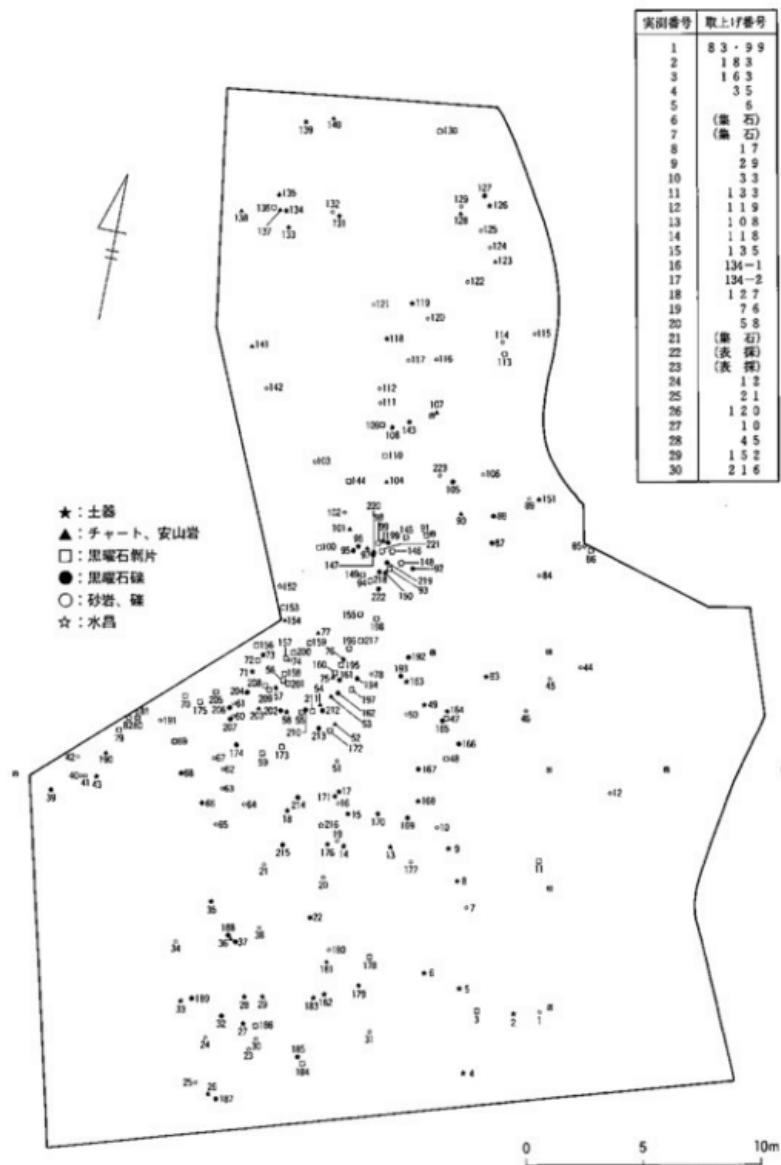
(5) このように磨石の形態から、側辺部の敲打痕から「粗割り」、平坦な摩耗面から「つぶし」、丸味を持つ摩耗面から「粉」と、3つの作業工程が推察できる。



第14図 遺物実測図③

No.	器種	層位	No.	器種	層位	No.	器種	層位	No.	器種	層位
1	礫	IV	57	土器	IV	113	黒曜石	IV	169	黒曜石礫	V
2	土器	III	58	土器	IV	114	礫	IV	170	土器	V
3	黒曜石	III	59	黒曜石	IV	115	礫	IV	171	土器	V
4	土器	IV	60	礫	IV	116	礫	IV	172	黒曜石	V
5	土器	IV	61	礫	IV	117	土器	IV	173	黒曜石	V
6	土器	IV	62	礫	IV	118	土器	IV	174	黒曜石礫	V
7	礫	IV	63	礫	IV	119	土器	IV	175	黒曜石	V
8	土器	III	64	礫	IV	120	磨石	IV	176	土器	V
9	土器	IV	65	礫	IV	121	磨石	IV	177	砂岩	V
10	磨石	IV	66	土器	IV	122	磨石	IV	178	黒曜石	V
11	黒曜石	IV	67	礫	IV	123	チャート	IV	179	土器	V
12	磨石	IV	68	黒曜石礫	V	124	磨石	IV	180	砂岩	V
13	土器	III	69	黒曜石	V	125	土器	IV	181	チャート	V
14	土器	IV	70	黒曜石	V	126	土器	IV	182	土器	V
15	土器	IV	71	土器	III	127	土器	IV	183	土器	V
16	礫	III	72	黒曜石	III	128	チャート	IV	184	黒曜石	V
17	土器	III	73	黒曜石礫	V	129	礫	IV	185	黒曜石礫	V
18	土器	IV	74	礫	IV	130	黒曜石	IV	186	黒曜石	V
19	礫	V	75	チャート	IV	131	土器	IV	187	黒曜石礫	V
20	礫	V	76	土器	IV	132	礫	IV	188	黒曜石礫	V
21	磨石	V	77	安山岩	IV	133	土器	IV	189	黒曜石礫	V
22	黒曜石礫	V	78	礫	IV	134	土器	IV	190	チャート	V
23	礫	V	79	黒曜石	IV	135	土器	IV	191	砂岩	V
24	黒曜石	V	80	黒曜石	IV	136	黒曜石	IV	192	黒曜石礫	V
25	礫	V	81	礫	IV	137	チャート	IV	193	黒曜石礫	V
26	土器	IV	82	黒曜石	V	138	安山岩	IV	194	黒曜石礫	V
27	土器	III	83	土器	IV	139	土器	IV	195	黒曜石	V
28	土器	III	84	礫	IV	140	チャート	IV	196	黒曜石	V
29	土器	IV	85	礫	IV	141	安山岩	IV	197	黒曜石	V
30	礫	V	86	黒曜石	IV	142	礫	IV	198	黒曜石	V
31	礫	V	87	黒曜石礫	IV	143	土器	V	199	黒曜石礫	V
32	黒曜石礫	V	88	黒曜石礫	V	144	黒曜石	V	200	黒曜石	V
33	土器	III	89	礫	V	145	黒曜石	V	201	黒曜石	V
34	礫	IV	90	安山岩	V	146	黒曜石	V	202	黒曜石礫	V
35	土器	IV	91	黒曜石	V	147	黒曜石礫	V	203	チャート	V
36	チャート	IV	92	黒曜石礫	V	148	黒曜石	V	204	黒曜石礫	V
37	黒曜石礫	V	93	黒曜石	V	149	黒曜石	V	205	黒曜石	V
38	礫	V	94	黒曜石	V	150	黒曜石礫	V	206	黒曜石礫	V
39	黒曜石礫	V	95	黒曜石礫	V	151	土器	V	207	黒曜石礫	V
40	礫	V	96	土器	IV	152	水晶	V	208	黒曜石	V
41	礫	V	97	安山岩	V	153	黒曜石	V	209	黒曜石	V
42	礫	V	98	黒曜石	V	154	チャート	V	210	黒曜石礫	V
43	土器	IV	99	土器	V	155	黒曜石	V	211	黒曜石	V
44	礫	V	100	黒曜石	V	156	黒曜石	V	212	黒曜石礫	V
45	打製石斧	V	101	チャート	V	157	黒曜石	V	213	黒曜石礫	V
46	礫	V	102	礫	V	158	黒曜石	V	214	黒曜石礫	V
47	黒曜石	V	103	礫	V	159	黒曜石	V	215	黒曜石礫	V
48	黒曜石	V	104	チャート	IV	160	黒曜石	V	216	水晶	V
49	土器	IV	105	黒曜石礫	V	161	黒曜石	V	217	黒曜石	V
50	礫	V	106	礫	V	162	黒曜石礫	IV	218	黒曜石礫	V
51	礫	V	107	チャート	IV	163	土器	V	219	黒曜石礫	V
52	安山岩	V	108	土器	V	164	土器	V	220	黒曜石礫	V
53	チャート	III	109	黒曜石	IV	165	黒曜石	V	221	黒曜石	V
54	チャート	III	110	黒曜石	V	166	黒曜石	V	222	黒曜石	V
55	黒曜石	III	111	礫	V	167	黒曜石	V	223	黒曜石	V
56	黒曜石	V	112	礫	V	168	土器	V			

第6表 遺物検出層位一覧



第15図 遺物分布図

第V章 まとめ

赤池永谷遺跡の発掘調査は、遺跡の先端部で行われた。

調査の結果、試掘で出土した縄文時代後期・晚期の土器は、調査区内に遺物包含層として残っていた。対して、縄文時代早期の遺物包含層は良好な状態であったが、前述の通り遺跡の先端部であったため、遺物の出土は極めて少なかった。その中で、水晶の剥片がV層より出土した。このことは、人吉・球磨地方における石器素材に水晶が加えられる事となり、一つの成果であった。しかし、V層から定形石器の出土が見られなかつたため、どの時代に素材として使用されたか不明である。

調査区の中央部から南側にかけて炭化物を含む土塙2基と集石1基が検出された。出土した炭化物を¹⁴C年代測定したところ、第1土塙は西暦1430年前後、第2土塙は西暦1330年前後という結果であった。集石内の炭化物については、紀元前3020±160年という結果で、これは土層の調査結果と誤差が生じたが、これらの結果は今後、多くのデータ蓄積によって解明できるものと思われる。

V層の下部で黒曜石が何点も出土したが、胸川水系の人吉市桑ノ木津留地区の黒曜石転石地に見られるような、自然露出そのもので、剥離作業の行われていないものがあった。その中には、石器を作るには小さ過ぎるものも含まれていた。

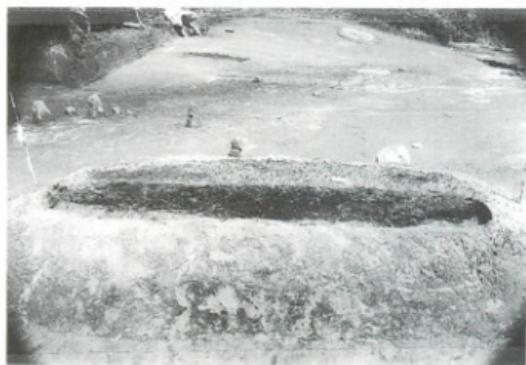
VI層はシラス(入戸火碎流)を含む凝灰岩円疊層であった。

VII層は狸谷遺跡(熊本県文化財調査報告第90集 1987年)の狸谷Ⅰ石器文化層に対比できる層で、管状の褐鉄鉱が出土した事により、シラスの下に植物体があった事を証明するものと思われる。

写 真 図 版



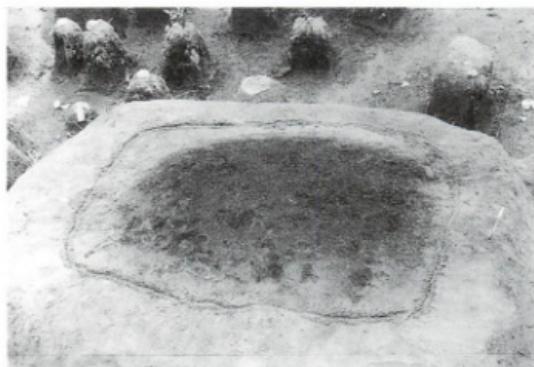
図版1 第1土塁 確認状況



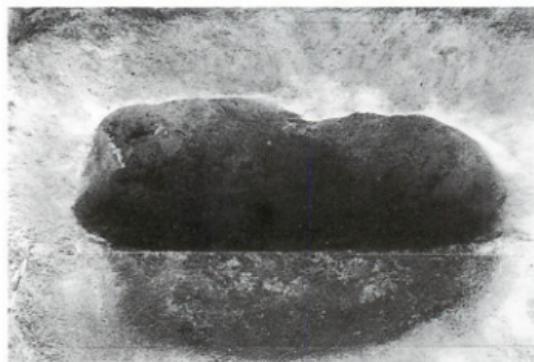
図版2 第1土塁 検出状況



図版3 第1土塁 完掘状態



図版4 第2土塙 確認状況



図版5 第2土塙 検出状況



図版6
第2土塙 炭化物検出状況①



図版 7

第2土塙 炭化物検出状況②



図版 8

第2土塙 炭化物検出状況③



図版 9

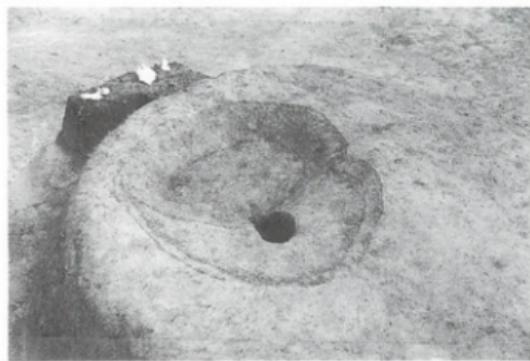
第2土塙 完掘状態



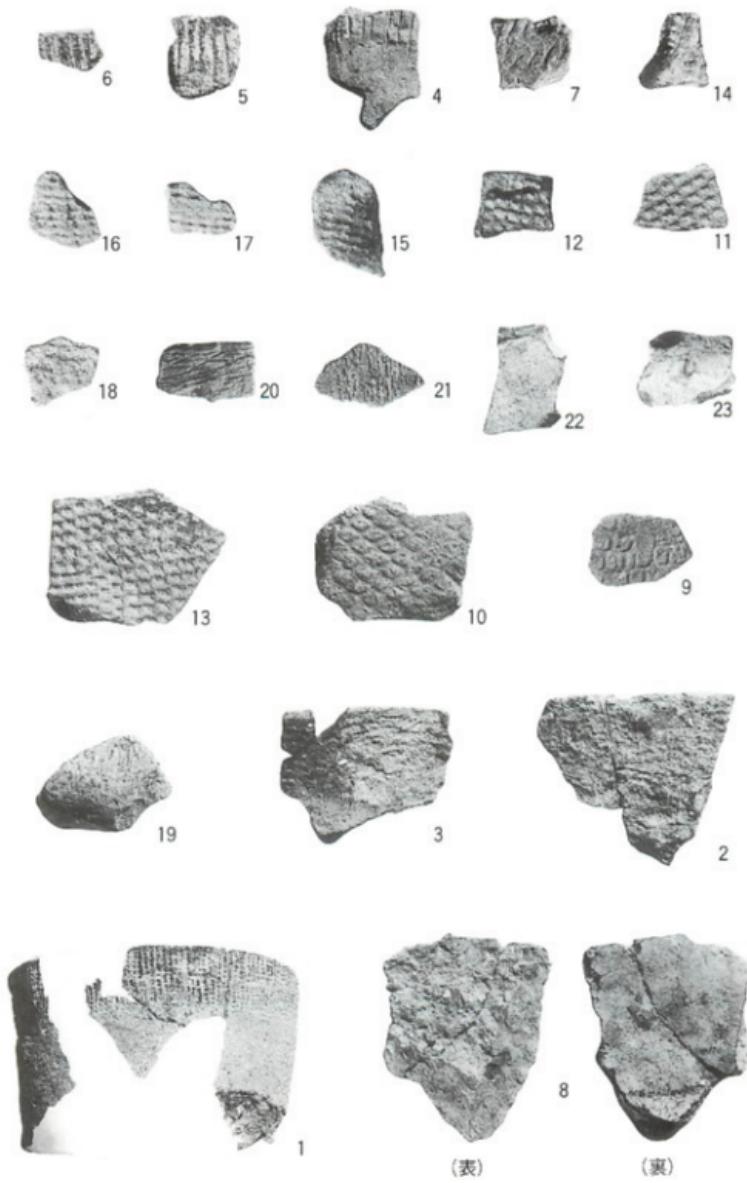
図版10 集石 確認状況



図版11 集石 検出状況



図版12 集石 完掘状態



図版13 出土遺物



図版14　遺跡航空写真

【参考文献】

- | | | |
|----------------------|-----------|---------------------------------|
| 「先縄文化への願い」 | 笠置英行 | 『磨都』第7号 県立人吉高等学校郷土研究部 1968年 |
| 『村山遺跡』 | 椎葉文雄 | 人吉市教育委員会 1979年 |
| 『多良木町史』原始編 | 乙益重隆 | 多良木町 |
| 『黒崎・鶴崎・阿蘇の縄文遺跡』 | 大田幸博・下村悟史 | 熊本県文化財調査報告第51集 熊本県教育委員会 1981年 |
| 『九州地方の縄石核』 | 木崎康弘 | 第55・56合併号 熊本史学会 1982年 |
| 『黒崎・鶴崎が社洞代跡について』 | 木崎康弘・松舟博満 | 『肥後考古』第2号 肥後考古学会 1982年 |
| 『在瀬のから』『動くは時鐘』 | 高田素次 | 1982年 |
| 『永野の旧石器』 | 松舟博満 | 『郷土』第10号 免田郷土研究会 1982年 |
| 『消される遺跡地』 | 松舟博満 | 『郷土』第11号 免田郷土研究会 1983年 |
| 『シラスの下の文化層』 | 松舟博満 | 『くまひと』第3号 1983年 |
| 『アンモン山遺跡』 | 椎葉文雄 | 人吉市教育委員会 1985年 |
| 『遺跡の概観』 | 木崎康弘 | 『肥後考古』第5号 肥後考古学会 1985年 |
| 『大丸・森ノ迫遺跡』 | 木崎康弘 | 熊本県文化財調査報告第80集 熊本県教育委員会 1986年 |
| 『聖谷遺跡』 | 木崎康弘 | 熊本県文化財調査報告第90集 熊本県教育委員会 1987年 |
| 『鳥越遺跡』 | 黒田裕司・松舟博満 | 相良村教育委員会 1987年 |
| 『里の城遺跡表様のナイフ形石器』 | 松舟博満 | 『球磨歴史談会会報』 1988年 熊本県教育委員会 1988年 |
| 『高城跡』 | 大田幸博 | 熊本県文化財調査報告第95集 旧石器文化談話会 1988年 |
| 『九州ナイフ形石器文化の研究』 | 木崎康弘 | 『旧石器考古学』第37号 1988年 |
| 『村山・開谷遺跡』 | 鶴鳴俊彦・和田好史 | 人吉市教育委員会 1988年 |
| 『鼓ヶ峰遺跡』 | 西住欣一郎 | 熊本県文化財調査報告第96集 人吉新聞社 1988年 |
| 『ふるさとの自然・人吉球磨の地質考』 | 原田正史 | 人吉市教育委員会 1988年 |
| 『七地水田遺跡』 | 大田幸博 | 熊本県文化財調査報告第101集 熊本県教育委員会 1989年 |
| 『球磨・人吉地方の先土器文化』 | 木崎康弘 | 『九州上代文化論集』 1990年 熊本県教育委員会 1990年 |
| 『城・馬場遺跡』 | 大田幸博 | 熊本県文化財調査報告第110集 熊本県教育委員会 1990年 |
| 『天道ヶ尾遺跡』 | 西住欣一郎 | 熊本県文化財調査報告第111集 熊本県教育委員会 1990年 |
| 『手向山式土器の壺について』 | 松舟博満 | 『肥後考古』第7号 肥後考古学会 1990年 |
| 『人吉市遺跡地図』 | 鶴鳴俊彦・和田好史 | 人吉市教育委員会 1991年 |
| 『肥後に於ける社洞時代研究の現状と課題』 | 木崎康弘 | 『交流の考古学』 肥後考古学会 1991年 |
| 『縄文早期の壺形土器』 | 新東晃一 | 『縄文通信』第4号 南九州縄文研究会 1991年 |
| 『中堂遺跡・長立寺跡』 | 和田好史 | 人吉市教育委員会 1991年 |

熊本県文化財調査報告第133集

赤池永谷遺跡

平成5年3月31日

〔編集・発行〕

熊本県教育委員会

〒860 熊本市水前寺6丁目18-1

TEL 096-383-1111

文化課文化財調査第2係(内線6715)

〔印刷〕

(株)大和印刷所

〒862 熊本市戸島町920-11

TEL 096-380-0303

04 教委 教文
② 012

この電子書籍は、熊本県文化財調査報告第133集を底本として作成しました。閲覧を目的としていますので、精確な図版などが必要な場合には底本から引用してください。

底本は、熊本県内の市町村教育委員会と図書館、都道府県の教育委員会と図書館、考古学を教える大学、国立国会図書館などにあります。所蔵状況や利用方法は、直接、各施設にお問い合わせください。

書名：赤池永谷遺跡

発行：熊本県教育委員会

〒862-8609 熊本市中央区水前寺6丁目18番1号

電話：096-383-1111

URL：<http://www.pref.kumamoto.jp/>

電子書籍制作日：2016年3月31日